



伴走者

来間夕口一

代役

マラソン歴 15年の守山は、一ヵ月後に迫った大会に向けて順調に練習を進めていた。

そんな時、同じマラソンサークルに所属する植木からある依頼があった。

「守山さん、どう調子は？」

「バッチリですよ。今回は自己ベストを出しますよ。」

「おお、素晴らしい。ところで、(同じサークルの)平井さんがね膝を痛めちゃってさ、大会に出られそうもないんだ。」

「それは残念ですね。」

「そうなんだよ。平井さんは今回、伴走をする予定だったからね、選手も困っているんだ。そこで、お願いがあるんだけど、守山さん、今大会で 伴走を引き受けて貰えないだろうか？」

マラソンにおける 伴走 とは、視覚障害者のパートナーとなりサポートしながら 共にマラソンを走る事を言う。

視覚障害者がマラソン大会に出場する際には、

伴走者が付く事が義務付けられている。

また伴走者は、あくまで伴走であり 選手扱いにはならず、

当然 記録(完走タイム)も残らない。

「守山さんも、大会に向けて頑張っている事は知っているが今回のブラインドランナー(視覚障害を持つランナー)は、四国から毎年エントリーされている方で、今回もとても楽しみにされているんだ。」

「そうですか。でも、僕は伴走をやった事無いですし、それに要領も判らない。

サポートするつもりが、逆に足を引っ張る事にならなければいいのですが。本当に僕で いいんですか？」

「ああ、大丈夫だよ。今回、守山さんをお願いした理由はね、伴走者は、選手より走力が求められる事と経験豊富な事だ。」

それに、二人の体格が似ているという事からだよ。

せっかく、順調に練習してきたのに、申し訳ないが なんとか…」

「あ、はい。いいですよ。でも、経験が無いので、色々教えて下さい。」

「勿論だ。いや～、助かったよ。ありがとう。」

じゃ、選手には、伴走の代役が決まったと連絡しておくよ。」

今まで守山は、自分の為だけに走って来たが、

今回、生まれて初めて 人の為に走る事になった。

選手と伴走者との絆

ブラインドランナーと伴走者は、同じサークル仲間である事が多く、練習も普段から一緒に行くケースが多い。

しかし、今回のように急な代役では、面識の無い人同士が、ぶっつけ本番でレースに挑む事がごくまれにある。

--- マラソン大会当日 マラソン会場にて---

膝を痛めて参加できない平井が、会場に来ていた。

「守山さん、今日はホント申し訳ない。見ての通りこのザマでね。」

「良いです。気にしないで下さい。

それより、伴走の要領を教えてください。」

「よし、判った。」

平井は、伴走経験の無い守山に 細かく伴走の役目を説明した。

そこへ、今回のブラインドランナーが現れた。

その選手は、日に焼けた肌、絞り込まれた筋肉で

とても52歳には見えなかった。

「守山さん、紹介するよ。今日のパートナー 川島さんだ。」

「川島さん、始めまして、今日御一緒させて頂く守山です。」

「守山さん、川島です。今日は、よろしくお願ひします。

聞けば、本来今日は選手でエントリーされていたそうで、無理をお願いして 申し訳ありません。」

「いえ、大丈夫です。今日は頑張りましょう。」

川島と守山は、ストレッチやジョギングをしながら自己紹介を始め、互いのレース経験等を語り合いながら、スタートに備えていた。

スタート30分前になると、選手はスタート地点に並ぶ。

そこで、今日のレース展開について 二人はシミュレートし始めた。

「川島さん、今日の目標は？」

「自己ベストのサブ4です。」

「判りました。」

サブ4は、フルマラソン(42.195km)を4時間未満でゴールすることで、多くの市民ランナーが目標としているタイム。

すると、平井が大声で叫びながら近づいてきた。

「お〜い、守山さん。大事な物 忘れてたよ。」

平井が、慌てて守山に届けてきた物、

それは直径50cm程の輪の形をした布製のロープだった。

このロープは、選手と伴走者とを繋ぐ物で、

レース中 このロープを互いに握ることで、二人は一心同体となる。

「あ、そうだった。コレが無いと失格でしたね。」

「守山さん、しっかりしてくれよ。さっき、教えたばかりじゃん！」

「僕も うっかりしてました。」

そう言って、川島は守山を弁護した。

川島は、守山をパートナーとして信頼したようだ。

二人のレースシミュレーションが終る頃、スタート5分前だった。

その後、言葉も無く緊張が張り詰めてきた。

ブラインドランナーだけでなく、周囲の他の一般選手達も同様だった。

皆、この日の為に、練習を重ねてきた。それが今、試されるのだ。

会場に設置されたスピーカーからアナウンスが流れてきた。

「スタート1分前です。……10秒前、……」

そして、パンッ というスタートピストルの音がした直後、

ドドーン と打ち上げ花火が 上がった。

「川島さん、さあ、行きましょう。42.195km先へ。」

「守山さん、遠慮は要りませんよ。」

選手達は それぞれ、思い思いの目標を掲げ

ゴールを目指して 走り始めた。

パートナーシップ

マラソンレースにおいて、ブラインドランナーの伴走を務める上で重要なのは選手より前に出ない事である。

何かの理由で一時的に前に出るのは構わないが、理由無く長時間前に出る事は選手の助力行為とみなされ、ルールで禁止されている。

守山は、川島の左側に並び走っていた。

二人の距離が近すぎると互いの腕が接触し、走行の妨げになる。

逆に離れすぎると、二人の持つロープが張って、腕に負担が掛る。

伴走が初めての守山は、少しでも川島の負担にならないよう

右往左往していた。

「守山さん、伴走って意外と難しいでしょ。」

「いやあ、距離間隔が難しいです。ペースは問題無いんですが。」

「そんなに気を使わなくても良いですよ。」

腕がぶつかれば、離れて。ロープがピンと張れば距離を詰める。

その繰り返しで良いですよ。人間関係もそうでしょ。」

「はい、判りました。」

気負っていた守山は、少し緊張が解れて来た。

そして、スタートから5km地点を通過した。

守山は、5km地点に設置されている記録時計を見て川島に伝えた。

「今、5km通過しました。タイムは28分。良いペースですよ。」

「28分か、まずまずの出だしかな。」

「川島さん、このペースを最後まで保てれば、サブ4ですよ。」

「いやあ、28分だとサブ4は苦しいね。」

終盤必ずペースが落ちるからね。」

「じゃ、少しペースUPしますか？」

「そう来なくちゃね。」

ペースを少し上げた二人は、前を走る選手たちを抜き始めた。

狭いコースで多くの選手が走っていると、真っ直ぐ走れない事が多い。

右側が空いていると思えば、右へ誘導し、左なら左へ誘導するのが
伴走者の仕事だ。

また、時として、びっしりと前が塞がっている事がある。

「すみません。ブラインドランナーです。コースを譲って下さい！」
守山が大きな声で言うと、何人かの選手が横に広がりコースが開いた。

コースを開けてくれた選手に川島は、ありがとうと 礼を言った。
すると、何人かの選手が、川島にエールを送った。

「頑張れ。」 「ファイト。」

「川島さん、優しいランナーが多いですね。」
「ああ、皆 競走してるけど 敵じゃないよ。」

守山は、今まで 我先に と競ってきた自分が少し恥ずかしく思えた。
しばらく走ると、エイドステーション(給水所)が見えてきた。

「川島さん、エイドです。水とスポーツドリンクどちらですか？」
「ドリンク お願いします。」

少しスピードを落とし ゆっくりとエイドの前を走る。
止まることなく、ドリンクを取った守山は、それを川島に渡した。

「ありがとう。」
「いえ。」

走りながら、ドリンクを飲み終えた二人は、ペースを上げて行った。
そして、10km地点を通過した時、記録時計は54分だった。

「今、10km通過。54分です。良いペースに上がってます。」
「このままのペースを保てれば、いいんだが。」

「頑張りましょう。」
「今日は、調子が良いみたいだ。サブ4行けるかも。」

選手の川島と伴走者の守山 二人のパートナーシップは
より固くなっていった。

自分との闘い

スタートから15km程の処を走っていると、
中間点(21km)で折り返してきたトップ選手とすれ違った。
市民マラソンのトップ選手は、42.195kmを2時間30分程で走り抜ける。
単純計算で 時速 17km弱のスピードで走っている事になる。

「今、トップとすれ違いました。速いですね。」
「このペースだと、トップは2時間28分位でゴールだな。」

「ところで、守山さんのベストは？」
「僕は、3時間29分です。」

「へえ、サブ4ランナーなんだね。
もちろん、サブ3を目指してるんだろ？」
「はい、いつかは サブ3なんですけど、なかなか届きません。」

「だろうな。サブ3ランナーなんて、ランナーの上位5%程だよ。
そう簡単には……。あ、守山さんって幾つだっけ？」
「今年で43歳になります。」

「じゃ、真面目に練習してれば50歳までには達成できるよ。」
「頑張ります。」

そうこう話していると、折り返した選手達と次々にすれ違う。
そして、ブラインドランナーのトップとすれ違った。

「あ、今ブラインドランナーのトップが来ました。速い。」
「だろ？このペースなら、2時間45分でゴールってとこかな。」

「そんなに速いんですか？」
「ああ、ブラインドランナーの世界記録を知ってるかい？」

「いえ、2時間40分ぐらいですか？」
「2時間30分さ。
2008年の北京パラリンピック優勝者が出した記録だ。」

「そんなに……」

「伴走者も大変だよ。」

話しながら走っていると、時間が経つのが早く感じた。

二人は20kmを順調に通過した後、折り返し、復路に入った。

そして、二人は これまで自分が出た大会での 楽しかった事や
悔しかった事、家族の事などを語り合い、お互いの人格を知った。

「守山さん 今、何km位だろう？」

「さっき、28kmを通過しました。きつくなってきましたか？」

「ちょっとね。でも、ペースは落とさないよ。苦しいけど。」

「判りました。」

二人は、30kmを通過した。

「川島さん、30km 2時間48分で通過しました。順調ですよ。」

「ここからが勝負だな。」

川島に、そろそろ疲れが見え始めてきた。

ペースを維持しようとして かなり無理をしているようだった。

それを察した守山は、川島に助言をした。

「川島さん、少しペースを落としますか？」

「いや、大丈夫だ。根性、根性。」

35kmを通過した二人は、エイドステーションに着いた。

フルマラソンのエイドステーションには、

何箇所かオニギリ等の食べ物も用意されている。

バナナ、梅干し、サンドイッチ、レモン、オレンジ等 結構 豊富だ。

「川島さん、エイドです。何か食べた方が良いでしょう。」

「少し休みましょう。」

「じゃ、そうするか。」

二人は、止まって ストレッチをしながら オニギリを2個食べた。

「よし、エネルギー充填完了。」

「じゃ、行きましょう、ゴールへ。」

「おう！」

二人は再び、走り始めた。

伴走という役割

二人は、40kmを3時間47分で通過したが、川島の顔に余裕は無かった。川島の脚は筋肉痛で重くなり、下腹部の腹筋も痛み出していた。

「川島さん、後半、ペースが落ちて、タイムの余裕が無くなりました。

あと、2kmを12分で行けますか？」

「1kmあたり6分か、終盤の6分/kmは、キツイねえ。」

「でも、それをやらないと サブ4は出来ませんよ。

ここまで来たら、やるしかないでしょう。」

「実は、毎度のパターンなんだよ。

終盤、必ず崩れて、あと一步のところでサブ4を逃がしてるんだ。」

「だったら、今日こそ 達成しましょう！」

「判ったよ。今日の伴走者は、厳しいねえ！」

「残り1km タイムは3時間54分です。このまま行きましょう！」

「あ、あと1kmね。よっしゃ！」

川島の顔は、苦しさを隠せなかった。

守山は、ひたすら川島を応援する事でサポートした。

ゴール会場が近くなると、沿道の人達が大きな声援を贈ってくれる。

川島は、そんな声援に後押しされ、歯を食いしばった。

そして、緩やかなカーブを曲がり、ゴールの陸上競技場に入った。

「川島さん、競技場に入りました。

あと、トラック1周半。600mです。」

「ハア、ハア、残りタイムは？」

「3分です。ラストスパートできますか？」

それとも、今日も泣きますか？」

「くっ、俺のスパート見せてやるよ！」

「はい！」

陸上競技場のトラックを二人は会話なく走った。

川島の荒い息と守山の左、左という誘導だけが二人に響く。

そして、

「川島さん、あと、10m・5m・1m」

「くっ、ハア、ハア……」

ゴールラインを超えた二人は、ゆっくりとペースを落とした。

「川島さん、ゴールしました！」

「ハア、ハア、…タイムは？」

「おめでとうございます。サブ4達成しましたよ。

記録は、3時間59分29秒。30秒も余裕ありました。」

「そ、そうか。やったか遂に。サブ4、できたんだ。」

選手の川島と伴走者の守山は、ガッチリと握手を交わし互いに 労いの言葉を掛けた。

「守山さん、ありがとう。お陰で、念願のサブ4が達成できました。あなたは、立派な伴走者でした。」

「川島さん、良い走りでしたよ。ありがとうございます。」

すると、達成感と充実感に満たされた川島の元へ一人の女性が近づいてきた。

「あなた、お疲れ様。その顔じゃ、目標達成出来たみたいね。」

そして、川島と川島の妻は、守山に礼を言うと、その場を去って行った。

しばらくして、平井が守山に近づいてきた。

「守山さん、お疲れ！聞いたよ。よくやったね。」

「やったのは、僕じゃなく 川島さんですよ。」

「いや、守山さんじゃなかったら、サブ4できてなかったね。」

「そうですかね？」

「で、どうだい、伴走者の感想は？」

「何か、不思議な気分です。」

「伴走者がいなければ、

ブラインドランナーはレースに出られないんだよ。」

「こんな僕でも、必要とされていたんですね？」

守山は、自分が人から必要とされた事、人の役にたった事が嬉しかった。

「マラソン人気の影響で、ブラインドランナーも最近増えてな、

伴走者は まだ足りないぐらいだ。」

「僕でよければ また、伴走者を引き受けますよ。」

そう言うと守山は、ゼッケンを外した。

そのゼッケンには、選手の様なナンバーは無い。

ただ、「伴走」と書かれていた。

FINISH